

2023年2月16日(木)14:00~15:40 オンライン開催 65名参加

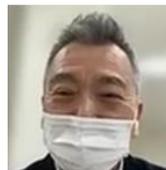
「パーキンソン病を持つ人に寄り添うために」

座長 神戸市西区医師会顧問 石原内科・リハビリテーション科 石原 健造 氏

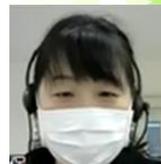
【第1部 講演】

テーマ：「パーキンソン病の病態と治療」

講師 兵庫県県立リハビリテーション中央病院
脳神経内科部長 奥田 志保 氏



石原 健造 氏



奥田 志保 氏

【第2部 パネルディスカッション・質疑応答】

テーマ：「パーキンソン病の日常生活支援」

パネリスト：兵庫県県立リハビリテーション中央病院 脳神経内科部長 奥田 志保 氏
訪問看護ステーションきらり 理学療法士 趙 源一 氏
「パーキンソン病に寄り添うために必要で大切なこと」
神戸市ケアマネジャー連絡会理事 あいの森 管理者 藪本 真理子氏
「パーキンソン病を持つ方に寄り添うには
～ケアマネジャーとして生活支援を支えるためにどう見立てるか～」



©2013kobe city No.R4-005

【第1部 講演内容】

1. パーキンソン病の原因
2. 運動症状・非運動症状
3. 診断
4. 治療
5. 治療上の注意点
6. 日常生活上の工夫

【講演の要点】

- ・中脳黒質の神経伝達物質(ドーパミン)が減少し情報伝達できず症状が出現
- ・100歳は20代のドーパミン量の2割にまで減少する
(2割にまで減少すると運動症状が出現する)=100歳は生理的なパーキンソン病
- ・脳内のドーパミン量は測定できない
- ・治療は薬物療法と運動療法
- ・初期(5年間)薬の効果大 初期からの運動療法は、少ない薬物量でコントロールできる
- ・中期(5年以降)薬効のある時のみ体が動く。ジスキネジア出現
- ・進行期・薬効不安定期(10年以降)薬の作用時間30分~2時間
- ・大きくゆっくりした動作を。声を出して動くと体が動きやすい
- ・病診連携、多職種連携で支える事が大切

【第2部 パネルディスカッション】

趙理学療法士：初期と進行期の症例を通し、理学療法士の関わりをお話し頂きました。

藪本ケアマネジャー：ケアマネとして把握しておくべきポイントやケアマネの役割についてお話し頂きました。



©2013kobe city No.R4-005



趙 源一 氏



藪本 真理子 氏

質疑応答

1. パーキンソン病の方への訪問薬剤師の関わりについて
➡飲み忘れ防止のために薬カレンダー・薬BOXの提供。薬が見える場所に設置。タイマー使用の提案。
2. ジスキネジアが激しくケアが難しい
➡レボドパ製剤(=Lドーパ：脳内でドーパミンに変わる)の1回量を減らす方法もある。
3. パワーリハは効果があるのか
➡筋力維持向上にはパワーリハは有効。動作が小さいならば大きく動作をするリハビリもある。

参加者の感想

薬剤師：薬物療法に加え初期からの運動療法が大切だとわかった。

看護師：多職種連携が重要だとわかった。

あんすこ職員：病気を理解し、難病を持つ方の辛さや不安に寄り添う事が大切であると改めて感じた。

ケアマネ：薬の調整とリハビリの重要性が分かった。

・専門医、かかりつけ医、歯科医等多くの連携が必要になる事がよくわかった。

・専門医でも確定診断に時間を要し、本人家族が現状を受け入れるにも時間を要す。

前向きになれるよう多職種連携をして支えていきたい。

多数のご意見ありがとうございました。

主催：西区医師会・西区医療介護サポートセンター